

経団連 低炭素社会実行計画 2018 年度フォローアップ結果

個別業種編

オフィスビル業界の低炭素社会実行計画

		計画の内容
1. 国内の事業活動における 2020 年の削減目標	目標水準	会員企業が所有・管理するオフィスビル共用部の床面積当たりエネルギー使用量について、2009 年度を基準として、2020 年度まで 15%削減する。
	目標設定の根拠	当連合会は、「ビルエネルギー運用管理ガイドライン」（当連合会が策定）において、主要なCO ₂ 削減対策項目について 2020 年までの目標実施率を設定し、この実施率目標が達成された場合、2020 年に床面積当たりのCO ₂ 削減率が2005 年比おおむね▲20%と見込んでおり、この見込み値を経年補正した。
2. 主体間連携の強化 (低炭素製品・サービスの普及を通じた 2020 年時点の削減)		
3. 国際貢献の推進 (省エネ技術の普及などによる 2020 年時点の海外での削減)		
4. 革新的技術の開発 (中長期の取組み)		
5. その他の取組・特記事項		<p>省エネ・省CO₂のため、次のとおり啓発活動を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オフィスビルのテナントや来館者への省エネ・省CO₂啓発のため、ポスターやリーフレット等を提供する ・ 当連合会または傘下の地方協会の主催により、省エネ・省CO₂に関する講演会を開催する ・ 当連合会または傘下の地方協会の主催により、省エネ・省CO₂に先進的なオフィスビルの見学会を開催する

オフィスビル業界の低炭素社会実行計画フェーズⅡ

		計画の内容
1. 国内の事業活動における 2030 年の目標等	目標・行動計画	会員企業が所有・管理するオフィスビル共用部の床面積当たりエネルギー使用量について、2009 年度を基準として、2030 年度まで 20%削減する。
	設定の根拠	年平均削減率▲0.5%(直近実績をもとに推計)が、2020 年度から 2030 年度までの間も継続する前提で見込んだ。
2. 主体間連携の強化 (低炭素製品・サービスの普及や従業員に対する啓発等を通じた取組みの内容、2030 年時点の削減ポテンシャル)		/
3. 国際貢献の推進 (省エネ技術の海外普及等を通じた 2030 年時点の取組み内容、海外での削減ポテンシャル)		/
4. 革新的技術の開発 (中長期の取組み)		/
5. その他の取組・特記事項		<p>省エネ・省CO₂のため、次のとおり啓発活動を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オフィスビルのテナントや来館者への省エネ・省CO₂啓発のため、ポスターやリーフレット等を提供する ・ 当連合会または傘下の地方協会の主催により、省エネ・省CO₂に関する講演会を開催する ・ 当連合会または傘下の地方協会の主催により、省エネ・省CO₂に先進的なオフィスビルの見学会を開催する

オフィスビル業における地球温暖化対策の取組み

2018年10月16日
一般社団法人日本ビルディング協会連合会

I. オフィスビル業の概要

(1) 主な事業

オフィスビル業は、事務所を主用途とするビルをテナントに賃貸する業務である。

(日本標準産業分類・細分類コード：6911貸事務所業、6941不動産管理業)

なお、当連合会は、オフィスビルの経営者による唯一の全国団体として、ビルの経営管理等に関する総合的な調査研究および普及啓発並びに会員相互の情報交流等の諸活動を行っている。

(2) 業界全体に占めるカバー率

会員数：約1,300社

延床面積の総数：約2,940万㎡

(全体の約15%に相当)

(3) データについて

【データの算出方法(積み上げまたは推計など)】

全会員を対象とするアンケート調査結果による

【生産活動量を表す指標の名称、それを採用する理由】

オフィスビル共用部の床面積当たりエネルギー使用量

(理由)

①原子力発電所の再稼働問題等により、電力の排出係数の予測が困難であるため、CO₂削減率でなく、エネルギー使用量の削減率を指標とした。

②オーナーが削減努力をしても、テナントの業態によりCO₂排出量が大きく変化してしまう(例えば、最新の省エネ設計ビルであっても、24時間稼働の国際金融業が入居すると排出量が増大)ため、オフィスビル全体でなく、共用部を対象とし、専用部は対象としなかった。

【業界間バウンダリーの調整状況】

■ バウンダリーの調整は行っていない

(理由)

他の業界団体で当連合会の目標指標は採用されていないため

□ バウンダリーの調整を実施している

<バウンダリーの調整の実施状況>

【その他特記事項】

II. 国内の事業活動における排出削減

(1) 実績の総括表

【総括表】

	基準年度 (2009年度)	2016年度 実績	2017年度 見通し	2017年度 実績	2018年度 見通し	2020年度 目標	2030年度 目標
生産活動量 (単位:〇〇)							
エネルギー 消費量 (単位:〇〇)							
電力消費量 (億kWh)							
CO ₂ 排出量 (万t-CO ₂)	※1	※2	※3	※4	※5	※6	※7
エネルギー 原単位 (:MJ/m ² ・年)	2,019.2	1,754.4		1,721.7	1,719.0	1,716.3	1,615.4
CO ₂ 原単位 (単位:〇〇)							

【電力排出係数】

	※1	※2	※3	※4	※5	※6	※7
排出係数[kg-CO ₂ /kWh]							
実排出/調整後/その他							
年度							
発電端/受電端							

(2) 2017年度における実績概要

【目標に対する実績】

<フェーズ I (2020年) 目標>

目標指標	基準年度/BAU	目標水準	2020年度目標値
オフィスビル共用部の床面積当たりエネルギー使用量	2009年度	▲15%	1,716.3

実績値			進捗状況		
基準年度実績 (BAU目標水準)	2016年度 実績	2017年度 実績	基準年度比 /BAU目標比	2016年度比	進捗率*
2,019.2	1,754.4	1,721.7	▲14.7%	▲1.9%	98%

* 進捗率の計算式は以下のとおり。

進捗率【基準年度目標】= (基準年度の実績水準 - 当年度の実績水準)

／(基準年度の実績水準 - 2020年度の目標水準) × 100(%)

進捗率【BAU目標】= (当年度のBAU - 当年度の実績水準) / (2020年度の目標水準) × 100(%)

<フェーズ II (2030年) 目標>

目標指標	基準年度/BAU	目標水準	2030年度目標値
オフィスビル共用部の床面積当たりエネルギー使用量	2009年度	▲20%	1,615.4

実績値			進捗状況		
基準年度実績 (BAU目標水準)	2016年度 実績	2017年度 実績	基準年度比 /BAU目標比	2016年度比	進捗率*
2,019.2	1,754.4	1,721.7	▲14.7%	▲1.9%	73.5%

* 進捗率の計算式は以下のとおり。

進捗率【基準年度目標】= (基準年度の実績水準 - 当年度の実績水準)

／(基準年度の実績水準 - 2030年度の目標水準) × 100(%)

進捗率【BAU目標】= (当年度のBAU - 当年度の実績水準) / (2030年度の目標水準) × 100(%)

【調整後排出係数を用いた CO₂排出量実績】

	2017年度実績	基準年度比	2016年度比
CO ₂ 排出量	万t-CO ₂	▲〇〇%	▲〇〇%

(3) 生産活動量、エネルギー消費量・原単位、CO₂排出量・原単位の実績

【要因分析】

(CO₂排出量)

要因	1990 年度 ➤ 2017 年度	2005 年度 ➤ 2017 年度	2013 年度 ➤ 2017 年度	前年度 ➤ 2017 年度
経済活動量の変化				
CO ₂ 排出係数の変化				
経済活動量あたりのエネルギー使用量 の変化				
CO ₂ 排出量の変化				

(%) or (万 t-CO₂)

(要因分析の説明)

(4) 実施した対策、投資額と削減効果の考察

【総括表】

年度	対策	投資額	年度当たりの エネルギー削減量 CO ₂ 削減量	設備等の使用期間 (見込み)
2017 年度				
2018 年度				
2019 年度 以降				

【2017 年度の実績】

(取組の具体的事例)

(取組実績の考察)

【2018 年度以降の取組予定】

(今後の対策の実施見通しと想定される不確定要素)

【BAT、ベストプラクティスの導入進捗状況】

BAT・ベストプラクティス等	導入状況・普及率等	導入・普及に向けた課題
	2017年度 ○○% 2020年度 ○○% 2030年度 ○○%	
	2017年度 ○○% 2020年度 ○○% 2030年度 ○○%	
	2017年度 ○○% 2020年度 ○○% 2030年度 ○○%	

(5) 2020年度の目標達成の蓋然性

【目標指標に関する進捗率の算出】

* 進捗率の計算式は以下のとおり。

$$\text{進捗率【基準年度目標】} = \frac{(\text{基準年度の実績水準} - \text{当年度の実績水準})}{(\text{基準年度の実績水準} - \text{2020年度の目標水準})} \times 100(\%)$$

$$\text{進捗率【BAU目標】} = \frac{(\text{当年度のBAU} - \text{当年度の実績水準})}{(\text{2020年度の目標水準})} \times 100(\%)$$

進捗率 = (計算式)

= 98%

【自己評価・分析】 (3段階で選択)

<自己評価とその説明>

■ 目標達成が可能と判断している

(現在の進捗率と目標到達に向けた今後の進捗率の見通し)

(目標到達に向けた具体的な取組の想定・予定)

(既に進捗率が2020年度目標を上回っている場合、目標見直しの検討状況)

目標達成に向けて最大限努力している

(目標達成に向けた不確定要素)

(今後予定している追加的取組の内容・時期)

目標達成が困難

(当初想定と異なる要因とその影響)

(追加的取組の概要と実施予定)

(目標見直しの予定)

(6) 2030年度の目標達成の蓋然性

【目標指標に関する進捗率の算出】

* 進捗率の計算式は以下のとおり。

$$\text{進捗率【基準年度目標】} = \frac{(\text{基準年度の実績水準} - \text{当年度の実績水準})}{(\text{基準年度の実績水準} - 2030 \text{ 年度の目標水準})} \times 100(\%)$$

$$\text{進捗率【BAU 目標】} = \frac{(\text{当年度の BAU} - \text{当年度の実績水準})}{(2030 \text{ 年度の目標水準})} \times 100(\%)$$

進捗率 = (計算式)

$$= 73.5\%$$

【自己評価・分析】

(目標達成に向けた不確定要素)

(既に進捗率が 2030 年度目標を上回っている場合、目標見直しの検討状況)

(7) クレジット等の活用実績・予定と具体的事例

【業界としての取組】

- クレジット等の活用・取組をおこなっている
- 今後、様々なメリットを勘案してクレジット等の活用を検討する
- 目標達成が困難な状況となった場合は、クレジット等の活用を検討する
- クレジット等の活用は考えていない

【活用実績】

【個社の取組】

- 各社でクレジット等の活用・取組をおこなっている
- 各社ともクレジット等の活用・取組をしていない

【具体的な取組事例】

取得クレジットの種別	
プロジェクトの概要	
クレジットの活用実績	

取得クレジットの種別	
プロジェクトの概要	
クレジットの活用実績	

取得クレジットの種別	
プロジェクトの概要	
クレジットの活用実績	

(8) 本社等オフィスにおける取組

【本社等オフィスにおける排出削減目標】

業界として目標を策定している

削減目標:〇〇年〇月策定

【目標】

【対象としている事業領域】

■ 業界としての目標策定には至っていない

(理由)

不動産協会による目標と重複するため

【エネルギー消費量、CO₂排出量等の実績】

本社オフィス等の CO₂排出実績(〇〇社計)

	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度
延べ床面積 (万㎡) :										
CO ₂ 排出量 (万 t-CO ₂)										
床面積あたりの CO ₂ 排出量 (kg-CO ₂ /m ²)										
エネルギー消費 量 (原油換算) (万 kl)										
床面積あたりエ ネルギー消費量 (l/m ²)										

II.(2)に記載の CO₂排出量等の実績と重複

データ収集が困難

(課題及び今後の取組方針)

【2017 年度の取組実績】

（取組の具体的事例）

（取組実績の考察）

(9) 物流における取組

【物流における排出削減目標】

業界として目標を策定している

削減目標:〇〇年〇月策定

【目標】

【対象としている事業領域】

■ 業界としての目標策定には至っていない
(理由)

【エネルギー消費量、CO₂排出量等の実績】

	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度
輸送量 (万トンキロ)										
CO ₂ 排出量 (万 t-CO ₂)										
輸送量あたり CO ₂ 排出量 (kg-CO ₂ /トンキロ)										
エネルギー消費 量 (原油換算) (万 kl)										
輸送量あたりエ ネルギー消費量 (l/トンキロ)										

II.(1)に記載の CO₂排出量等の実績と重複

データ収集が困難

(課題及び今後の取組方針)

【2017 年度の取組実績】

(取組の具体的事例)

(取組実績の考察)

III. 主体間連携の強化

(1) 低炭素製品・サービス等の概要、削減見込量及び算定根拠

	低炭素製品・サービス等	削減実績 (推計) (2017年度)	削減見込量 (ポテンシャル) (2020年度)	削減見込量 (ポテンシャル) (2030年度)
1				
2				
3				

(当該製品等の特徴、従来品等との差異、及び削減見込み量の算定根拠や算定の対象としたバリューチェーン／サプライチェーンの領域)

(2) 2017年度の取組実績

(取組の具体的事例)

(一社)不動産協会、(一社)建設業連合会、電力業界、ガス業界等と連携して、オフィスビルの革新技術の実用化・普及について積極的な情報交流を図ってきた。

(取組実績の考察)

(3) 家庭部門、国民運動への取組み

【家庭部門での取組】

【国民運動への取組】

(4) 森林吸収源の育成・保全に関する取組み

(5) 2018年度以降の取組予定

IV. 国際貢献の推進

(1) 海外での削減貢献の概要、削減見込量及び算定根拠

	海外での削減貢献	削減実績 (推計) (2017年度)	削減見込量 (ポテンシャル) (2020年度)	削減見込量 (ポテンシャル) (2030年度)
1				
2				
3				

(削減貢献の概要、削減貢献量の算定根拠)

(2) 2017年度の実績

(取組の具体的事例)

(取組実績の考察)

(3) 2018年度以降の取組予定

(4) エネルギー効率の国際比較

V. 革新的技術の開発

(1) 革新的技術・サービスの概要、導入時期、削減見込量及び算定根拠

	革新的技術・サービス	導入時期	削減見込量
1			
2			
3			

(技術・サービスの概要・算定根拠)

(2) 革新的技術・サービス開発・導入のロードマップ

	技術・サービス	2017	2018	2019	2020	2025	2030
1							
2							
3							

(3) 2017年度の実績

(取組の具体的事例)

(取組実績の考察)

(4) 2018年度以降の取組予定

VI. その他

- (1) CO2 以外の温室効果ガス排出抑制への取組み

VII. 国内の事業活動におけるフェーズⅠ、フェーズⅡの削減目標

【削減目標】

＜フェーズⅠ(2020年)＞(2015年1月策定)

会員企業が所有・管理するオフィスビル共用部の床面積当たりエネルギー使用量について、2009年度を基準として、2020年度まで▲15%削減する。

＜フェーズⅡ(2030年)＞(2015年1月策定)

会員企業が所有・管理するオフィスビル共用部の床面積当たりエネルギー使用量について、2009年度を基準として、2030年度まで▲20%削減する。

【目標の変更履歴】

＜フェーズⅠ(2020年)＞

＜フェーズⅡ(2030年)＞

【その他】

(1) 目標策定の背景

オフィスビル業界は、東日本大震災およびその後の緊急節電などにより、省エネ対策が飛躍的に進んだが、わが国の中長期的削減目標を達成するため、オフィスビルのさらなる省エネ化を図るものである。

(2) 前提条件

【対象とする事業領域】

会員が所有・管理するオフィスビル

【2020年・2030年の生産活動量の見通し及び設定根拠】

＜生産活動量の見通し＞

当連合会の実行計画では、「ビルエネルギー運用管理ガイドライン」の主要なCO₂削減対策項目について、2020年までの目標実施率を設定し、この実施率目標が達成された場合、2020年に床面積当たりのCO₂削減率が2005年比おおむね▲20%と見込んでおり、この見込み値を経年補正して2020年目標を2009年比▲15%とした。

年平均削減率▲0.5%（直近実績をもとに推計）が2020年度から2030年度までの間も継続する前提で、2030年目標を2009年比▲20%とした。

＜設定根拠、資料の出所等＞

「ビルエネルギー運用管理ガイドライン」

会員あてアンケート調査

【その他特記事項】

(3) 目標指標選択、目標水準設定の理由とその妥当性

【目標指標の選択理由】

- ①原子力発電所の再稼働問題等により、電力の排出係数の予測が困難であるため、CO₂削減率でなく、エネルギー使用量の削減率を指標とした。
- ②オーナーが削減努力をしても、テナントの業態によりCO₂排出量が大きく変化してしまう（例えば、最新の省エネ設計ビルであっても、24時間稼働の国際金融業が入居すると排出量が増大）ため、オフィスビル全体でなく、共用部を対象とし、専用部は対象としなかった。

【目標水準の設定の理由、自ら行いうる最大限の水準であることの説明】

<選択肢>

- 過去のトレンド等に関する定量評価(設備導入率の経年的推移等)
- 絶対量/原単位の推移等に関する見通しの説明
- 政策目標への準拠(例:省エネ法1%の水準、省エネベンチマークの水準)
- 国際的に最高水準であること
- BAUの設定方法の詳細説明
- その他

<最大限の水準であることの説明>

会員が所有・管理するビルを対象に運用改善の見通しや耐用年数等を考慮した設備投資計画を分析するとともに、地方都市における設備投資余力を考慮し、設定した。

【BAUの定義】 ※BAU目標の場合

<BAUの算定方法>

<BAU水準の妥当性>

<BAUの算定に用いた資料等の出所>